

氏 名 吉野 優香
学位の種類 博士（心理学）
学位記番号 博甲第 9106 号
学位授与年月 平成 31年 3月 25日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
審査研究科 人間総合科学研究科
学位論文題目 被援助場面における感謝感情と負債感情が
向社会的行動に及ぼす影響過程

主 査 筑波大学教授 博士（心理学） 相川 充
副 査 筑波大学教授 文学博士 松井 豊
副 査 筑波大学准教授 博士（心理学） 湯川 進太郎
副 査 筑波大学教授 博士（心理学） 沢宮 容子

論文の内容の要旨

吉野優香氏の博士学位論文は、被援助場面において受益者が経験する感謝感情と負債感情が、その後の受益者が実行する向社会的行動に及ぼす影響を検討したものである。その要旨は以下の通りである。

（目的） 著者は、まず、これまでの感謝研究においては、被援助場面における受益者が利益供与者に対して経験する感謝感情と負債感情を、相反する感情として扱ってきた点を問題として指摘し、これを踏まえて、本論文の目的を、感謝感情と負債感情が共起することを前提にして、両感情が向社会的行動に及ぼす影響過程を明らかにすることとしている。著者は、この目的を達成するために、次の3点の観点から検討を試みている。

第1は、受益者が実行する向社会的行動の動機の側面を明確にするため、制御焦点理論に基づいた観点を採用することである。第2に、向社会的行動の受け手である対象者が、被援助場面における利益供与者か、それとも第三者であるかを区別することである。第3に、当初の被援助場面での受益者と、向社会的行動の対象者との関係性が、新規であるか既存であるかを区別することである。

（方法） 著者は、研究1、研究2では、感謝感情と負債感情の共起を確認するために、場面想定法による質問紙調査を行った。研究3では、共起した感謝感情と負債感情の特徴を、感情喚起手法の1つである「感謝の手紙」を用いた質問紙調査で検討した。研究4では、共起した両感情の特徴を明らかにするために、別の感情喚起手法である「感情経験の追体験」を用いた実験室実験を行った。研究5では、制御焦点理論に基づく動機の測定項目を作成するために2つの質問紙調査を行った。研究6から研究10にかけては、感情喚起手法の「感情経験の追体験」と「制御焦点動機」の項目を用いて、感謝感情と負債感情が、向社会的行動に及ぼす影響過程を検討した。研究6では、向社会的行動の対象者が利益供与者である場合の両感情の影響を検討することを目的とし、友人ペアの実験室実験を行い、研究7では、場面想定法を用いた質問紙調査を行った。研究8では、向社会的行動の対象者が第三者である場合の両感情の影響を検討することを目的とし、排斥された他人への向社会的行動を測定する実験室実験を行い、研究9では、場面想定法を用いた質問紙調査を行った。

研究 10 では、日常で経験する感謝感情と負債感情が向社会的行動の実行コストに及ぼす影響を検討するために 15 日間の日誌法を行った。

(結果) 著者は、研究 1 で、Wood et al. (2008) モデルの再現性の確認をし、研究 2 では、そのモデルを拡張した「感謝感情と負債感情の共生起過程モデル」を新たに提示した。この共生起過程モデルは、感謝感情と負債感情が、被援助内容に関する主観的評価の総体である「利益の評価」の高低に規定されて、同一場面で共起することを示している。

研究 3, 研究 4 では、「感謝の手紙」「感情経験の追体験」いずれの感情喚起手法においても、同様の感情状態を喚起できることを確認し、感謝感情と負債感情は共起するが、常に同程度に経験されるのではなく、感謝感情の経験だけが強く、負債感情の経験が弱い場合と、感謝感情と負債感情の経験がともに強い場合があることを明らかにした。以上の研究 1 から研究 4 によって、感謝感情と負債感情の共起を明示し、両感情の共起を前提とした本論文における研究の基盤を築いた。

研究 5 では、制御焦点理論に基づく動機である促進焦点動機と予防焦点動機の程度を測定する項目を作成した。また、感謝感情と負債感情が共起するという前提における、特性感謝、特性負債感と特性的な制御焦点動機との関係は、両感情が相反するという前提の先行研究の結果とは異なることを示した。

研究 6 では、向社会的行動の対象者が利益供与者であり、関係性が既存であるときには、感謝感情と負債感情がともに強く経験されている場合は、向社会的行動が増すことを示した。その影響過程を研究 7 で検討し、感謝感情は、対象者との関係性に関わらず、促進焦点動機、予防焦点動機のどちらも高め、間接的に向社会的行動を促進することを明らかにした。ただし、感謝感情のみの影響は、向社会的行動の対象者が新規であるときには抑制的であり、既存であるときには、影響がなかった。他方、負債感情は、向社会的行動の対象者が新規であるときは、促進焦点動機、予防焦点動機のどちらも高め、向社会的行動を促進し、対象者が既存であるときは、促進焦点動機を高め、向社会的行動を促進したが、予防焦点動機への影響は見られなかった。また、負債感情のみの影響は、対象者との関係にかかわらず向社会的行動を促進させることを示した。

研究 8 では、向社会的行動の対象者が第三者であり、関係性が新規であるときには、感謝感情と負債感情が共起している場合は、コストのかかる向社会的行動を増加させることを示した。その影響過程を研究 9 で検討し、感謝感情は、向社会的行動の対象者との関係性にかかわらず、促進焦点動機と予防焦点動機の両方を高め、向社会的行動を促進し、負債感情は、予防焦点動機を高めることによって向社会的行動を促進することを明らかにした。

研究 10 では、日常で経験される感謝感情は、予防焦点動機を介することで、高コストな向社会的行動を翌日に実行させやすくし、負債感情は、直接、高コストな向社会的行動を翌日に行わせやすくすることを示した。

(考察) 著者は、以上の実証的検討から、共起した感謝感情と負債感情はどちらも、向社会的行動に促進的な影響を及ぼすが、その影響過程は、感情ごとに異なり、また向社会的行動の対象者の違い、および対象者との関係性によって異なることを明らかにした。著者は、このような結果に関して、プライミングとモデリングの観点からの説明の可能性を提言し、最後に、感謝研究と教育分野に対する本論文の貢献について言及した。

審査の結果の要旨

(批評) 著者は本論文において、感謝研究をベースとし、従来の研究では独立したものとして、あるいは相反するものとして扱われてきた感謝感情と負債感情を同時に扱い、両感情が向社会的行動に及ぼす影響過程を、調査法（場面想定法や日誌法）と実験法による多様な手法を用いて検討している。また、感謝感情と負債感情が向社会的行動に対して促進効果を持つことを示すだけでなく、その影響過程に関して、制御焦点理論に基づく動機の観点から検討し、向社会的行動の対象者、その対象者と受益者との関係性によって区分した検討を加えている。これらの諸点の検討によって、両感情が向社会的行動に及ぼす影響過程を精緻に捉えたと評価された。

平成 30 年 12 月 26 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判断した。よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。